



愛隣幼稚園.....

# 園だより

.....14. 10月号

## 「いい仕事してるよね！」

皆さんは秋分の日を知らせてくれるメッセンジャーをご存知ですか？そう、“彼岸花”です。私の住む町にも毎年、この花が咲く場所があります。今年もまた鮮やかな赤い華がいつもの場所に、いつもと同じように咲いていました。梅や桜の開花の時期は年によって大きく変わることがあるのに、この花はその名の通り毎年きちんと“お彼岸”に咲くのです。9月のある日、突然地中から現れて、秋分の日に合わせて華を咲かせる姿に不思議な自然の力をもらいます。

9月の保護者会の中で、27年度から施行される子ども・子育て支援新制度について少しお話をさせていただきました。待機児童を無くして女性の社会進出を後押しし更に人口増加に繋げること、すべての子どもに良質の幼児教育を均一に提供することなどを目的に、幼稚園や保育園の一部が認定こども園という新しい施設に移行すること（愛隣幼稚園は現在の幼稚園のままです。）や、これからの幼児教育に懸念されることなどお話をしました。その中で私は「日本という国全体の“豊かさ”に対する価値観が変わらなければ」と呟きました。しかし、事はそんなに大袈裟なことではなく、私たちひとり一人が“しあわせ”とか“豊かである”とはどうということなのかを問い直すことから始めればいいのかと今は思っています。「女性の社会進出」が悪いわけではありません。生きがいを感じ、結婚・出産後も動き続けることで得られる充実感や満足感、達成感そして自信、更に加わるのは経済的な余裕。どれも私たちにとって魅力的なものです。でもここで問いなおしてみます。この時、私たちは“しあわせ”と感じ生活も“豊か”になります。その一方で、子どもは毎日10時間ほど（8時間勤務で前後1時間を通勤時間として）を保育所で過ごすことになります。すると、大好きなお家の人と一緒に過ごすことができる時間は僅かに4時間ぐらい（子どもの睡眠時間として10時間を確保）です。そのうち、子どもたちが心も体も満たされる幸せな時間はどれくらい保障されているのでしょうか。子どもたちの毎日は、日々成長！昨日できなかったことが、今日できるようになります。おしゃべりの中で、愉快な語りを繰り広げてくれることもしばしばです。泣いたり笑ったり、心も大きく成長していきます。それは期間限定です。ですから実は、親が子どもたちの隣でこのドラマティックな時間を享受できるということはとても贅沢なことです。（残念ながらその渦中ではこれに気付くことが難しい。）心に余裕がなければこの時間が自分の人生を“豊か”にしているとは気付きにくいのです。だからそのことに気付いている同志はその“豊かさ”について語ってほしいと思います。子どもの隣にいて共に暮らす私たちが「子育て」する私たちをきちんと評価し、そこにいる自分を肯定し、自信をもってその価値を外に向かって語っていかないと、この業は評価されないままになってしまいそうです。女性の社会進出は目に見える結果を生み出します。生産的です。社会的な評価も伴っています。対して「子育て」は浪費・消費、非生産的、苦勞が多い割には報われないというイメージがつかまえます。それでそんなに大変なことなら楽にして差し上げましょう、と親の needs に応えて service が提供される。今や母子の夕食も朝食も子どもの洗濯物も service として提供される保育園もあるようです。家は寝に帰る所でしかなく、家族は本来の機能を失います。効率や生産性や金銭で評価される価値の中にだけ“豊かさ”を追求していくと、目には見えない“豊かな”ものをどんどん失っていきます。そこで子どもは生物としてだけ成長し、人格としての成長を阻害される。女性の社会進出が評価されるように、ライフサイクルの中での「子育て」という業がもっと高い評価を受けなければ、失うものは更に大きくなってしまわないのでしょうか？誰かに評価されるのを待っているわけにはいかないので、私たちが私たちの「子育て」に自信と誇りをもっていいように思います。『いい仕事してるよね！』この“豊かさ”を知っている人たちが、やがて本当に“豊かな”社会を創りだしていってくれると私は期待しています。